

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

1/5

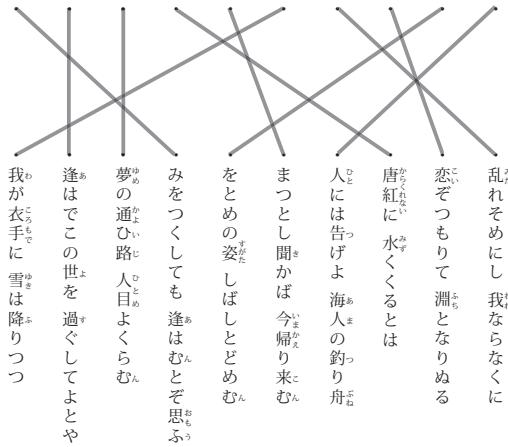


上の句

- 1 秋の田のかりほの庵の苦をあらみ
- 2 春過ぎて夏来にけらし白妙の
- 3 あしひきの山鳥の尾のしだり尾の
- 4 田子の浦にうち出でてみれば白妙の
- 5 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の
- 6 かささぎの渡せる橋におく霜の
- 7 天の原ふりさけ見れば春日なる
- 8 我が庵は都の辰巳しかぞ住む
- 9 花の色は移りにけりないたづらに
- 10 これやこの行くも帰るも別れでは

上の句

- 11 わたの原八十島かけて漕いでぬと
- 12 天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ
- 13 筑波嶺の峰より落つる男女川わ
- 14 陸奥のしのぶもちずり誰ゆゑに
- 15 君がため春の野に出でて若菜摘む
- 16 立ちわかれいなばの山の峰に生ふる
- 17 ちはやぶる神代も聞かず龍田川わ
- 18 住の江の岸に寄る波よるさへや
- 19 難波濱短き岸の節の間も
- 20 わびぬれば今はた同じ難波なる



下の句

- 世をうち山と人はいふなり
- 三笠の山に出でし月かも
- 長々し夜を独りかも寝む
- 知るも知らぬも逢坂の関
- わが衣手は露にぬれつつ
- 衣ほすてふ天の香貝山
- 声聞く時ぞ秋は悲しき
- 富士の高嶺に雪は降りつつ
- 我が身世にふるながめせし間に
- 白きを見れば夜ぞ更けにける

「百人一首 初めてかるた」制作:ポリゴンドリル

下の句

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

2/5

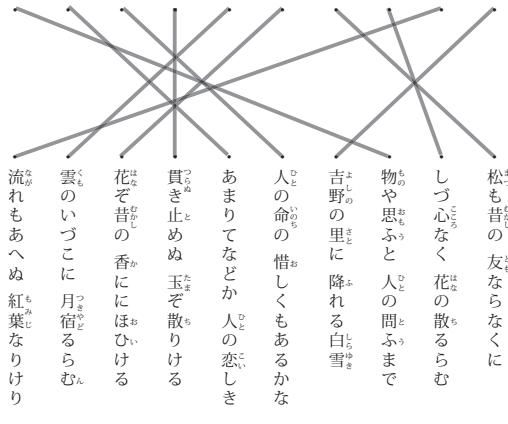


上の句

- 21 今來むといひしばかりに長月の
- 22 吹くからに秋の草木のしをるれば
- 23 月見ればちぢに物こそ悲しけれ
- 24 このたびは幣もとりあへず手向山
- 25 名にし負はば逢坂山のさねかづら
- 26 小倉山のみぢ葉心あらば
- 27 みかの原わきて流るるいづみ川
- 28 山里は冬ぞ寂しさまさりける
- 29 心あてに折らばや折らむ初霜の
- 30 有り明けのつれなく見えし別れより

上の句

- 31 朝ぼらけ有り明けの月と見るまでに
- 32 山川に風のかけたる柵は
- 33 久方の光のどけき春の日に
- 34 誰をかも知る人にせむ高砂の
- 35 人はいさ心も知らずふるさとは
- 36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
- 37 白露に風の吹きしく秋の野は
- 38 忘らるる身をば思はず誓ひてし
- 39 浅茅生の小野の篠原忍れど
- 40 忍れど色に出でにけり我が恋は



下の句

- 人に知られでくるよしもがな
- むべ山風を嵐といふらむ
- ありあけの月を待ち出でつるかな
- 一度の行幸待たなむ
- 置きまどはせる白菊の花はな
- いつ見きとてか恋しかるらむ
- 人目も草もかれぬと思へば
- 曉ばかり憂きものはなし
- 紅葉の錦神のまにまに
- 我が家身一つの秋にはあらねど

「百人一首 初めてかるた」制作:ポリゴンドリル

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

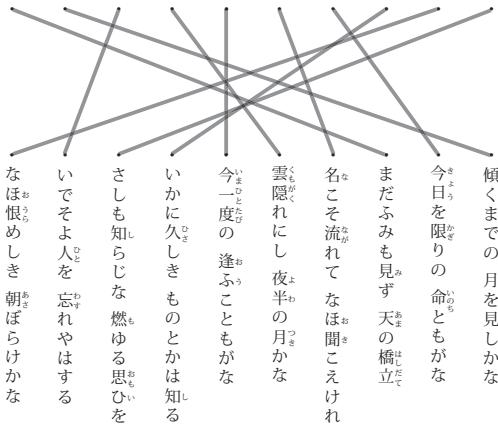
3/5



上の句

下の句

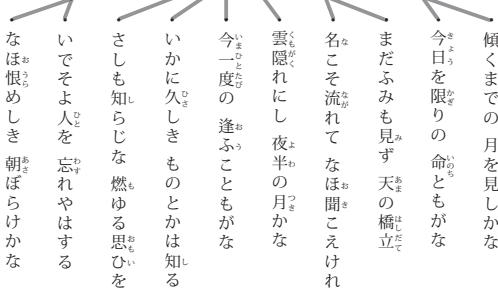
- | | |
|----------------------|----------------|
| 41 恋すてふ 我が名はまだき立ちにけり | 昔は物を思はざりけり |
| 42 契りきなかたみに袖をしほりつつ | 身のいたづらになりぬべきかな |
| 43 逢ひ見ての後の心に比ぶれば | ひとこ見えね秋は来にけり |
| 44 逢ふことの絶えてしなくはなかなかに | ゆくへも知らぬ恋の道かな |
| 45 あはれともいふべき人は思ほえで | 長くもがなど思ひけるかな |
| 46 由良の門を渡る舟人かぢを絶え | 人知れずこそ思ひ初めしか |
| 47 八重葎茂れる宿のさびしきに | くだけて物を思ふ頃かな |
| 48 風をいたみ岩打つ波のおのれのみ | 昼は消えつつ物をこそ思へ |
| 49 みかき守衛士のたく火の夜は燃え | 末の松山波越さじとは |
| 50 君がため惜しからざりし命さへ | ひとをも身をも恨みざらまし |



上の句

下の句

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 51 かくとだにえやはいぶきのさしも草 | 傾くまでの月を見しかな |
| 52 明けぬれば暮るるものとは知りながら | 今日を限りの命ともがな |
| 53 嘆きつつ独り寝る夜の明くる間は | まだふみも見ず天の橋立 |
| 54 忘れじの行く末までは難ければ | 名こそ流れてなほ聞こえけれ |
| 55 滝の音は絶えて久しくなりぬれど | 雲隠れにし夜半の月かな |
| 56 あらざらむこの世の外の思ひ出に | 今一度の逢ふこともがな |
| 57 めぐり逢ひて見しやそれどもわかぬ間に | いかに久しきものとかは知る |
| 58 有馬山猪名の笛原風吹けば | いでそよ人を忘れやはする |
| 59 やすらはで寝なましものをさ夜更けて | さしも知らじな燃ゆる思ひを |
| 60 大江山いく野の道の遠ければ | なほ恨めしき朝ぼらけかな |



「百人一首 初めてかるた」 制作: ポリゴンドリル

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

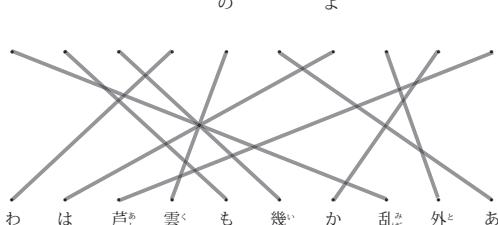
4/5



上の句

下の句

- | | |
|---------------------|----------------|
| 61 いにしへの奈良の都の八重桜 | よに逢坂の関は許さじ |
| 62 夜をこめて鳥の空音はかかるとも | 龍田の川の錦なりけり |
| 63 今はただ思ひ絶えたむとばかりを | 今日九重に匂ひぬるかな |
| 64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに | 人づてならでいふよしもがな |
| 65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを | あらはれ渡る瀬々の網代木 |
| 66 もろともにあはれと思へ山桜 | いづこも同じ秋の夕暮れ |
| 67 春の夜の夢ばかりなる手枕に | 恋しかるべき夜半の月かな |
| 68 心にもあらで憂き世にながらへば | 花より外に知る人もなし |
| 69 嵐吹く三室の山のもみぢ葉は | 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ |
| 70 さびしさに宿を立ち出でて眺むれば | かひなく立たむ名こそ惜しけれ |
| 71 夕されば門田の稲葉おとづれて | あはれ今年の秋もいぬめり |
| 72 音に聞く高師の浜のあだ波は | かけじや袖の濡れもこそすれ |
| 73 高砂の尾の上の桜咲きにけり | 乱れてけさは物をこそ思へ |
| 74 うかりける人を初瀬の山おろしよ | 外山の霞たたずもあらなむ |
| 75 契りおきしさせもが露を命にて | かけじや袖の濡れもこそすれ |
| 76 わたの原漕ぎ出でて見れば久方の | 幾夜寝覚めぬ須磨の関守 |
| 77 瀬を早み岩にかかるる滝川の | もれ出づる月の影のさやけさ |
| 78 淡路島通ふ千鳥の鳴く声に | 雲居にまがふ沖つ白波 |
| 79 秋風にたなびく雲の絶え間より | 芦のまろやに秋風ぞ吹く |
| 80 長からむ心も知らず黒髪の | はげしかれとは祈らぬものを |



- | | |
|--------------------|---------------|
| 71 夕されば門田の稲葉おとづれて | あはれ今年の秋もいぬめり |
| 72 音に聞く高師の浜のあだ波は | かけじや袖の濡れもこそすれ |
| 73 高砂の尾の上の桜咲きにけり | 乱れてけさは物をこそ思へ |
| 74 うかりける人を初瀬の山おろしよ | 外山の霞たたずもあらなむ |
| 75 契りおきしさせもが露を命にて | かけじや袖の濡れもこそすれ |
| 76 わたの原漕ぎ出でて見れば久方の | 幾夜寝覚めぬ須磨の関守 |
| 77 瀬を早み岩にかかるる滝川の | もれ出づる月の影のさやけさ |
| 78 淡路島通ふ千鳥の鳴く声に | 雲居にまがふ沖つ白波 |
| 79 秋風にたなびく雲の絶え間より | 芦のまろやに秋風ぞ吹く |
| 80 長からむ心も知らず黒髪の | はげしかれとは祈らぬものを |

「百人一首 初めてかるた」 制作: ポリゴンドリル

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

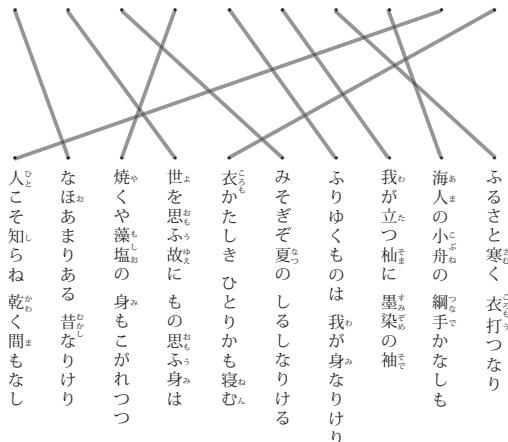
5/5



上の句

下の句

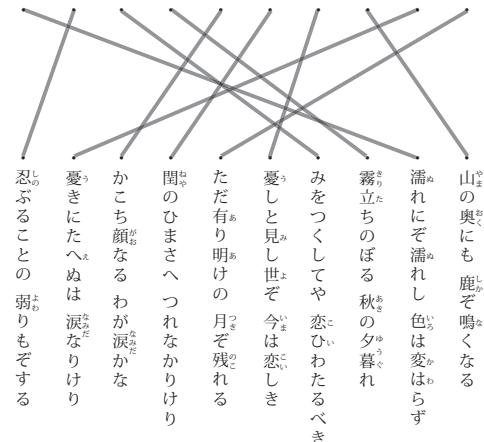
- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 81 ほとどぎす 鳴きつる方を 眺むれば | 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる |
| 82 思ひわび さても命は あるものを | 濡れにぞ濡れし 色は変はらず |
| 83 世の中よ 道こそなけれ 思ひに入る | 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ |
| 84 ながらへば またこの頃や 忍ばれむ | みをつくしてや 恋ひわたるべき |
| 85 夜もすがら 物思ふ頃は 明けやらで | ただあり明けの 月ぞ残れる |
| 86 喋げとて 月やは物を 思はする | 憂しと見し世ぞ 今は恋しき |
| 87 村雨の 露もまだ干ぬ 樅の葉に | かこち顔なる わが涙かな |
| 88 難波江の 芦のかりねの ひとよゑ | 憂きにたへぬは 涙なりけり |
| 89 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば | 忍ぶことの弱りもぞする |
| 90 見せばやな 雄島の海人の 袖だにも | |



上の句

下の句

- 91 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに
92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の
93 世の中は 常にもがもな 渚滑ぐ
94 み吉野の 山の秋風さ夜更けて
95 おほけなくうき世の民に 覆ふかな
96 花ざそふ 嵐の庭の 雪ならで
97 来ぬ人を 松帆の浦の 夕風に
98 風そよぐ ならの小川の 夕暮れは
99 人も惜し 人も恨めし あぢきなく
100 ももしきや 古き軒端の しのぶにも



「百人一首 初めてかるた」 制作: ポリゴンドリル

できた?

たいせん
じゃ、チャマメと対戦しよう

ま
アプリで待ってるよ

